

まえがき

本書の前身は、日本土壤動物学会のニュースレター「どろのむし通信」に10年来連載してきた「サラダニをだしにした命名規約の話」である。土の中はわけのわからんモノでいっぱいだと、昔の人はのたまわった。土壤動物という自然分類でないジャンルに各動物群の研究者が集まって学会まで作り上げてしまったのは、そのような知的好奇心のなせる技といえる。分類学指向の若手研究者が（勿論プロも）勢揃いしているというもうなずける。自分の勉強も兼ねて書き始めた学名解説の発表先としては、申し分がなかった。本書は統一をとるために書き下ろしとし、国際動物命名規約第4版を条文ごとに逐一解説した。元の連載の雰囲気は囲み記事などに残っている。連載では英文解釈講座・翻訳家養成講座の様相もあったが、本書では英語学習の色合いはかなり薄くなった。間違っただけで買わないように。

国際動物命名規約というプロのためのハンドブックのような感覚があるので、一般の方は始めから敬遠するかもしれない。第1版和訳書は本文だけならたった51頁（A5版）なのだが、学生のころ結構とつきにくかったのを覚えている。分類に興味がない人には確にかつかみ所がないだろう。第4版和訳書の本文はB5版85頁（実質2倍強）に膨張した。こんなものはプロでなければ読めるはずがないのだ。本書は、毛色の変った解説書である。プロからアマまで動物の学名を扱うすべての人を対象とし、欲張って執筆した。プロの方には可能な限りの解釈方法をこれでもかというほど提示させてもらった（書名の副題がテーマである）。アマの方には書名のとおり「動物学名の仕組み」についてのドキュメントタッチになっている。ただし専門家でなければちょっと（かなり？）難しいかもしれない。しかし、ややこしい所は飛ばし読みをすれば、真に解説書を希求して本書を手に入れた方も、おおよそ記載分類にかかわりのない方も、記事のあちこちに必ずや興味を持っていただけるのではないかと思う。

これまで学名の説明や命名規約の部分的解説はいくつも出ている。しかし本書のように命名規約の全体をこれほどに徹底して解説したものはない。命名規約の解説は、とりもなおさず学名の解説でもあり、しかもいちいち根拠を示しているわけだから、これほどの決定版もないわけだ。その気になれば私がどのように読み間違えたかを指摘するのは簡単だろうし、逆に私の読み間違いではないと納得できれば、即自分の思い違いを訂正できるだろう。また解説には、原文に書かれていない背景や、解釈方法の私見、規則に対する批判や将来の展望と希望まで、何もかも詰め込み、分類学に詳しくない読者にも理解できるようにと初歩的な説明も網羅するように努めた。専門でない方なら、学名に関する疑問のひとつおりの答えは見つかるのではなからうか。

現在の国際動物命名規約は1999年に出版された第4版になり、その日本語版は2000年に発刊された。原書は、英語版と仏語版が1冊にまとまっている。英語版は仏語版からの翻訳のようだ。そのため本当の意味における原本は仏語版である。訳本は読みにくいものと相場が決まっている。だから英語版も難解なのだ。そのまた訳本である日本語版は言わずもがなである。文学作品であると、意識、言い換え、説明の追加、省略など、翻訳技巧の限りを尽くして読みやすい日本語の文章が創造される。しかし命名規約のような法律文の訳文は、読みやすさよりも、原文に忠実でなければならない。必然的に、直訳に近くなる。しかし一般的に言って、直訳はまともな言葉ではない。命名規約日本語版が読みにくいもう一つの理由である。そこで本書は解説書のスタイルを取り、1) 意識を必要とする文章（原語版）に解説を加え、2) 一方では直訳調になりがちな文章（日本語版）から生じる間違っただけの解釈を指摘するという方針で執筆した。とにかく原書の難しさは如何ともしがたい。当然のことながら（と、当然のように言うてはならないのであるが）本書にも間違っただけの解釈があるに違いない（間違いなくある）ことは、あらかじめお断りしておかなければならない。文字通り一字一句の解釈をとことん追及した。適当にお茶を濁して解説すれば、無難な本にできただろう。しかし問題点を徹底的に洗い出し

てみたかったのである。原文には、ところどころに論理的間違い、下手な構文、曖昧な表現、条文間の矛盾などの欠陥が存在する。それに加えて英語版や日本語版には原版からの誤訳や不適切訳がある。本書の指摘によってそれらの問題の多さが尋常でないことに驚くことになるだろう。

条文は、互いに関連し合っている。始めから終わりまで何回も読み返さなければ全体像は見えてこないものである。そのような精読が、薄い第1-2版では可能であった。複雑肥大化した第4版では、問題が多いこともあって、1回読むだけで精根尽きてしまう。独学で（解説書なしという意味で）時間をつぶすのははっきり言って損である。本書はかなり大部であるが、粗読一回でも原本を数回読むだけの理解が得られるだろう。国際動物命名規約と見比べながら読むべきものであるが、本書だけでも耐えるように書いたつもりである。必要な条文だけ拾い読みするのではなく、ぜひ始めから順番に読んでみていただきたい。必ずやアマチュアの方には目からウロコ、プロの方には驚天動地の感覚を味わっていただけるものと思う。多くの人にとって学名操作の時間の節約になれば嬉しい。そして学名のより正しい運用が推進されれば幸いである。